

第10話 毛利氏の興起

川中島の第1回戦と同じ年に起こった安芸の厳島の戦い。

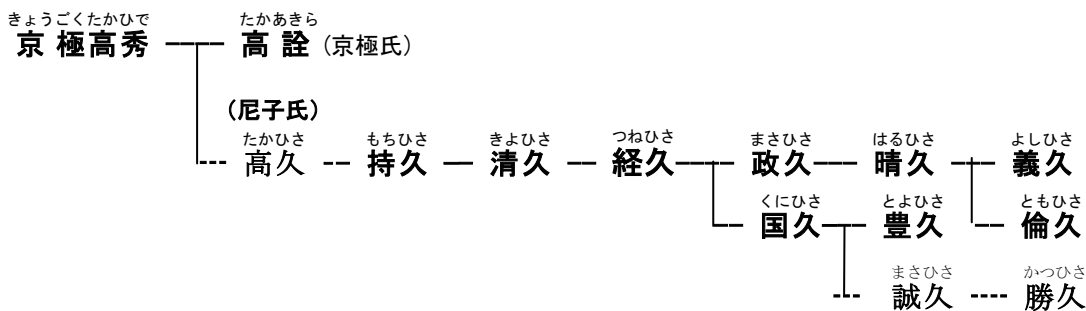
名族の大内氏と尼子氏を忽ちのうちに滅ぼして、毛利元就が10余カ国の領主となる。

厳島の戦い

戦国時代には、日本全国いたるところで勢力の争いが起こったので、すでに度々述べて来た通り、戦争もまた従って到るところで行われたが、中でも上杉謙信と武田信玄とが初めて川中島に戦った同じ年（後奈良天皇の弘治元年）の10月、信濃とは遠く離れた安芸の国（広島県西部）の厳島（訳注：宮島）に起こった戦いは、1日にして中国地方の形勢を全く一変してしまったもので、とりわけ注目すべき戦いの一つとなっています。

厳島の戦いは、毛利元就と陶晴賢とが戦って、晴賢が滅ぼされたのですが、この戦いの意義を知るためには、先づ其の頃の中国地方の形勢を一瞥しておく必要があります。

さて、関東で、北條早雲が崛起して、その子の氏綱が頻りに勢威を張っていた頃、中国地方に強い勢力をもっていたのは、周防（山口県南部）の大内氏と出雲（島根県東部）の尼子氏とでした。



山陰の尼子氏

尼子氏は室町時代の四職の1家である京極氏の1族でして、持久の代にはじめて京極氏の名代として出雲の守護職となり、山陰に下ったのでした。その子の清久は、京極氏の命を聞かなかったために逐しりぞけられたが、後に、清久の子の尼子経久が密かに出雲に帰って、尼子氏に取って代わっていた代官塩治氏を滅ぼして、富田城に拠ってからは、しきりに四方を蚕食して、ついに出雲、隠岐、因幡、伯耆の諸国を併せ、更に石見を侵したり、安芸を略したりして、ますますその勢力を張っていました。

山陽の大内氏

この山陰の尼子氏と境を接していたのが、山陽の大内氏です。大内氏の祖先は百済の帰化人から出ています。代々周防（山口県東南部）にいて、大内介と称していたが、義弘に至って大いに現れた。将軍義満の時に、義弘が乱を企てて（第2話の「関東管領と永享の乱」に少し述べたように）誅されて、家は一時衰えたが、後また次第に勢いを回復した。彼の玄孫義興に至って、ますます盛んとなり、

ついにその領地は周防、長門、豊前、筑前、安芸、石見の6カ国に及んだ。

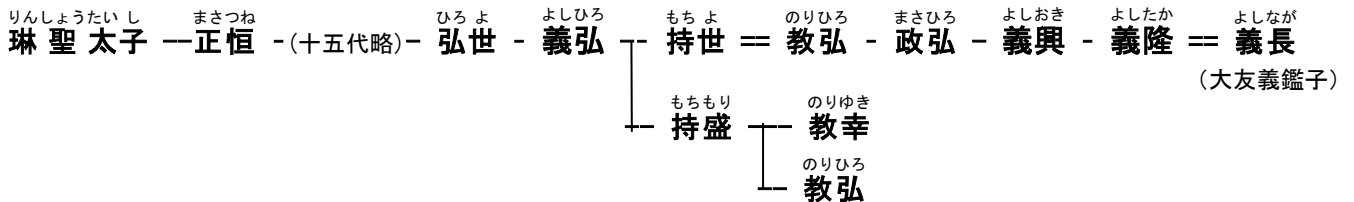
大内氏はまた室町時代から、代々明および朝鮮との貿易をも管理していたので、これによっても莫大な利益を収めて、財政もまた頗る豊かでしたので、その城下の山口は、京都にもまさったほどに賑わって、世に西都とまで呼ばれ、そのころ関東で大いに繁昌していた小田原と並び称せられて、東西の2大都会といわれました。

大内義興

それで、応仁の乱の前後に、京都で生活に苦しんでいた公卿達の中には、山口に来て義興の世話になった者が少なくなかったが、8代将軍の足利義植もまた彼を頼ってきた一人です。はじめ義植は管領の細川政元に廃されると、逃げて、ほうぼうに行き、政元を倒そうと図ってみたが、ついに1つも成功しなかったもので、山口に来たのでした。すると、大内義興はこれを奉じて京都に行き、再び義植を将軍職につけて、自分は管領代となって11年の間これを補佐した。

そのために京都は、めづらしくも一時よく治まったので、義興はその功によって従三位に叙せられた。武士にしてこの位を授かったものは、これまでに畠山持国と赤松政則とがあっただけでしたという事です。この一事を見ても、いかに義興の勢力が盛んであったかがわかります。後に国に帰ってからは、尼子氏としばしば戦って、しきりに勝利を博したが、ついに享禄元年12月に、52才を以て薨じた。

(大内氏)



大内義隆

義興の後は、その子の大内義隆が家を嗣いだ。尼子氏とは尚互いに戦って、勝ったり負けたりしていたが、やがて備後(広島県東部)もまた彼の勢力範囲に帰した。又、九州のほうへも頻りに兵をだして、騒乱を鎮めたりして、彼はますますその声望を高めた。

其の頃、朝廷の御衰えが甚だしく、第105代後奈良天皇は御踐祚の後、10年になってもまだご即位の式をお挙げにならないというような始末でした。この時、義隆はその費用を奉ったので、その功により、太宰の大式に補せられ、昇殿をゆるされた。その後はしきりに官位を進められて、ついに従二位に進み、兵部卿に任ぜられたが、一方で、彼は家の富強を恃んで、次第に心が驕って来た。政治を怠り、軍備を顧みなかった上に、軍功などの少しもない、お世辞の上手な阿諛丁寧の徒のみを近づけて、日夜酒宴に耽り、あるいは茶の湯、蹴鞠などの遊びを事としていた。家老の陶晴賢が大いにこれを憂いて、たびたび諫めたが、義隆は少しもその言葉を用いないのみか、却って晴賢を嫌って遠ざけるようにした。

陶晴賢

第10話 毛利氏の興起

それで、晴賢はついに腹を立てて、兵をあげて大内義隆を討とうとした。義隆ははじめて驚いて、あわてて兵を集めて自らを守ろうとしたが、彼の人望は既に地に堕ちてしまっていたので、いくらも集まらなかった。そうこうするうちに、晴賢の兵にその居館を囲まれたので、今はいかんともすることが出来なくなり、ついに安芸の毛利元就に復讐してくれるようにという依頼の手紙を出しておいて自殺した。時に天文20年の9月で、義隆は45才でした。

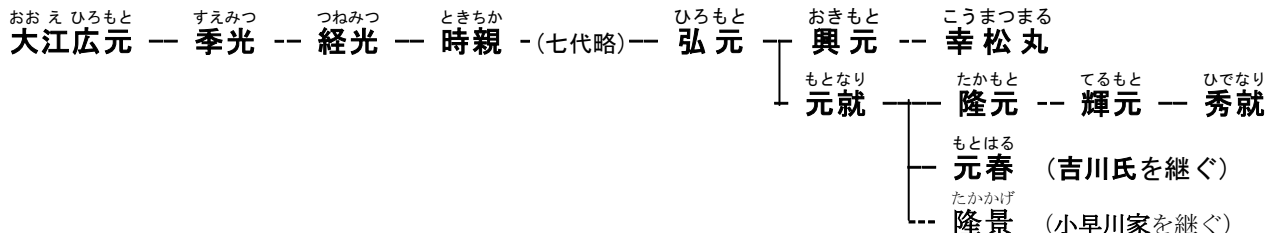
大内氏の後は、義隆の姉の子の義長を晴賢が九州の大友家から迎えて継がせたが、しかし、これはただ体裁を整えただけの事であって、実際の政治や何かは、ことごとく晴賢が自分の思うままにした。勿論、義隆が驕奢に耽って諫言を用いなかったのはよくないが、といっても、主君を弑した晴賢のよくないことはいうまでもない。ここにも戦国時代の「下克上」の1つの例をわれわれは悲しく見ます。

ところで、大内義隆から復讐を依頼された毛利元就は、一体どういう人でしたか？

安芸の毛利氏

そもそも毛利氏は、源頼朝に仕えた大江広元から出ています。広元の子の季光が相模の毛利の庄を領して始めて毛利氏を称したので、安芸に移ったのは季光の孫の時親の代でした。彼は、足利尊氏に属して功があったので、安芸の吉田の地頭職に補されたのです。(吉田は広島市の東北42kmのところであって、今は町になっている) それで、代々その地の郡山城に住んで毛利弘元に至った。

(毛利氏)



元就の生い立ち

元就は弘元の子です。幼名は松寿丸といった。幼い時から頗る聡明であったということで、それについてはいろいろな逸話なども伝えられている。

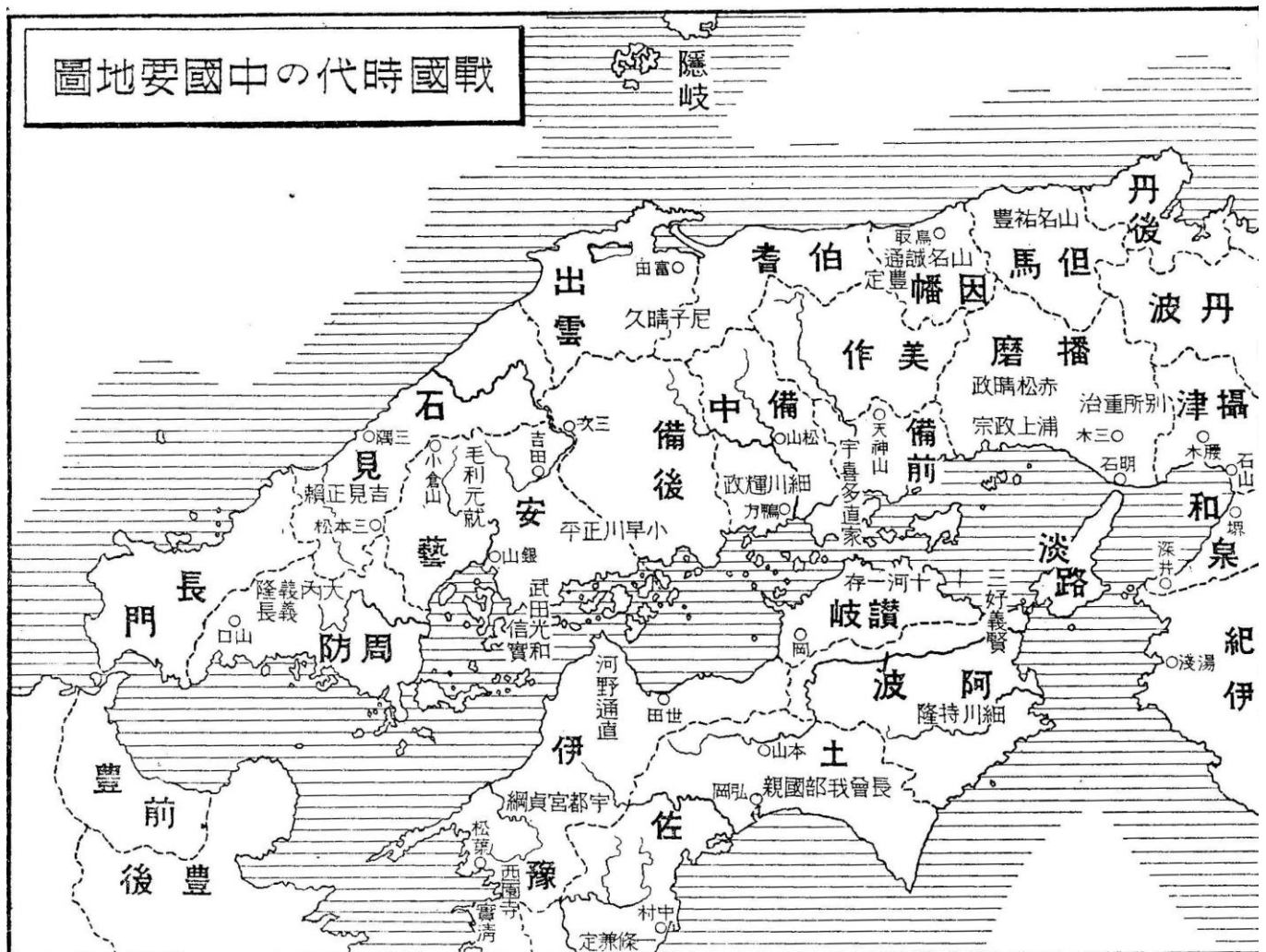
ある時、お守役の者に負われて川を渡った時に、お守役の者が石につまづいて、川の中に倒れたので、松寿丸も共にびしょぬれになった。お守役の者はすぐに起き上がって、無事に岸にのぼったが、すっかり恐れ入って、おわびをすると、松寿丸は笑って、「普通の途を歩いても躓くことはある。況して川の中のことだ。お前のつまづいたのは、背中にいるわたしの事にばかり気を取られていたからだろう。何も心配することはない」といって、少しも咎めなかったということです。

又、12才の時に、お供をつれて厳島神社に参詣したが、その帰りに、「お前たちは何を祈ったか？」とお供の者に尋ねた。「若様が安芸全体のご領主におなりになるようにとお祈り申しました」と答えると、「なぜ天下の主となるようにと祈らなかったのだ？ 棒ほど願って針ほど叶うというではないか。天下の主となろうと思って、やっとなら中国の主となることが出来るくらいのものだ。中国の主となろうと思ったの

では、やっと1国の主ぐらいにしかなれない。況して、初めから1国の主となろうなどと願ったのでは、いったい何になれると思う」と言ったので、お供の者らは大いに驚いて、感嘆したということです。

もとなり いえ つ
元就、家を継ぐ

さて、^{ひろもと}弘元の後には、^{もとなり}元就の兄の^{おきもと}興元が継いだ。が、^{おきもと}興元は^{もとなり}元就が23才の時に亡くなったので、その子^{こうまつまる}の幸松丸がその後を承けた。この時、^{こうまつまる}幸松丸は僅かに5才の幼年でしたので、^{ばんじ}万事は^{もとなり}元就が後見して、これを^{たす}輔けることにした。ところが、^{こうまつまる}幸松丸は9才で病死して、^{おきもと}興元には外に子が無かったので、^{もとなり}元就が^{ぶんけ}分家から入って^{ほんけ}本家を継ぐことになった。そこで、彼は、^{さるかけ}これまでいた^{こおりやま}猿掛城（^{ごかしわばら}郡山城の西約4kmのところ）から^{ほんじょう}毛利氏の本城である^{じょうしゅ}郡山城に移ってその城主となった。第104代^{ごかしわばら}後柏原天皇の大永3年7月のことで、^{もとなり}毛利元就が27才の時でした。



おおうちし むす
大内氏と結ぶ

しかし、そのころの毛利氏の領地は、僅かに安芸国の1小部分だけだったので、その勢力などはもとより言うにも足らなかつた。しかも北には山陰の尼子氏があり、西には山陽の大内氏がいて、少しでも油断していたら、いつ滅ぼされるかも知れないような有様でした。それで、^{もとなり}元就は、初めは主として^{あまこ}尼子氏に頼って家を^{たも}保ってたが、^{あまこ}尼子氏はややもすれば^{たお}毛利氏を倒そうとするような様子だったので、後には、ついに意を決して

第10話 毛利氏の興起

おおうち たよ ちょうし たかもと おく ひとぢち よしたか かた むす
大内氏に頼ることにした。 彼は先づ長子の隆元を山口に送って人質とした上で、大内義隆と固く結んで尼
たいこう
子氏に対抗しました。

ところが、尼子氏は天文10年11月に経久が88才で亡くなって、孫の晴久が家を継いだ頃から、次第
おとろ もとなり ごころ せいぢ もち もとなり
にその勢力が衰えはじめたので、元就はやや安心して、その後は一層心を領地の政治に用いた。 元就は
しみん はげ へい あつ ちから やしな やさき お てんもん
よく士民をいたわり励ますと共に、ますます兵を集めて力を養っていた。 その矢先に起こったのが天文
そうどう もとなり
20年の大内家の騒動です。 この時、元就は55才でした。

あだう じゅんぴ 仇討ちの準備

もとなり はるたか よしたか しい はるたか みかた ふう
毛利元就は初め、陶晴賢が大内義隆を弑した時には、晴賢の身方をするような風をしながら、しきりに
すす おとしい こ りょうち ひろ
兵を進めて安芸国内の大内氏の城を陥れていた。 彼は斯うして先づ自分の領地を広めたのです。 しか
よしたか ふくしゅう いらい てがみ み よしたか おん う たの
し、やがて義隆の復讐を依頼する手紙を見ると、「自分はこれまで義隆の恩を受けているのだから、恃まれ
あだう てがみ もら いじょう じゅんぴ
なくても仇討ちをすべきであるのに、手紙を貰った以上はなおさらだ」とて、ひそかにその準備にかかった。
はるたか う せいりよく
しかし、まだまだ晴賢を討つほどの勢力が毛利氏には無かったので、あわてずせかずに、彼はその勢力を養
きかい いた ま
いながら、機会の到るのを待っていた。

よし み まさより 吉見正頼

すると、天文23年の5月、かねて陶晴賢と仲のわるかった石見国津和野（島根県西部）の城主吉見正頼
こうぜん はるたか そむ はるたか いわみ つわの よしみ まさより
が、公然と晴賢に叛いたので、晴賢は大軍を率いて津和野に向った。 この時、安芸の南部の、今の広島市
しゅしやう はるたか
附近の諸城の守将も多くは晴賢に従って出発した。

もとなり えんべい
すると、元就は、一方で吉見氏に援兵を送ると共に、一方
るす おそ
で、これらの守将の留守になった諸城を襲って、しだいにこれ
お いつくしま せんりやう はるたか
を落として行って、ついに厳島をも占領した。 晴賢は津和
おどろ もとなり さ む
野でこれを聞いて大いに驚き、すぐに1将を元就に差し向け
たちま もろ う やぶ
たが、これは忽ち脆くも打ち破られた。

はるたか よしみ てい わ こう
晴賢はますます驚いて、吉見氏と体よく和を講じて兵を津
もよお いっきよ ほろ
和野から引き上げると、大軍を催して、一挙に毛利氏を滅ぼ
そうとした。

もとなり さくせん 毛利元就の策戦

この時、陶氏の軍は少なくとも30,000はあっただろうに、
もうり た
毛利氏の軍は5,000にも足らないくらいでした。 そこで、
もとなり たぜい ぶぜい ふつう ひろ へいち たたか
元就は考えました。 この多勢と無勢で、普通に広い平地で戦ったのでは、とても勝利はおぼつかない。 ど
せま けんそ たいぐん じゅう かつどう よ ふい おそ
こか狭い、険阻な、大軍が自由には活動出来ないようなところにおびき寄せて、不意にこれを襲ったならば、
しょうり え
きっと勝利を得られようと。

彼はつくづくと思案をめぐらした末に、厳島の有の浦（今の連絡船の着く附近）に城を築くことに



もうり もとなり
毛利元就

第10話 毛利氏の興起

した。老臣らはその地が攻められ易く、守り難いことを説いて頻りに反対したが、元就は一切これを聞き入れずに、ついに、そこに宮尾城を築いて、部下の己斐氏に300の兵を授けてこれを守らせた。実に天文23年の翌年、即ち、弘治元年5月のことです。

そして城が出来上がると同時に、元就は巧みに次のような噂を世間に立てさせた。「元就は老臣の諫めを聴かずに、厳島に城を築いたが、今は一生の過ちであったとあって、つくづく後悔しているそうだ。というのは、もし優勢な敵が厳島に上陸して、四方に船を出して交通を絶ったならば、身方はいかんともこれを救うとが出来ないからである。せめては敵を厳島に渡さないようにして、この過ちを取り返そうと、今は専らそれに苦心している」と。

晴賢が厳島に渡る

この噂が伝わり伝わって来たのを晴賢は山口で聞いて、大いに喜んだ。そうだ、先づ厳島を占領して、晴賢は元就めに一泡ふかせて、その勢いに乗じて安芸1国を奪い返してくれよう。毛利氏を打ち滅ぼすことなどは瞬くうちだと、早速に命令を下して、弘治元年の9月3日に、自ら20,000余騎を率いて山口を出発して、その7日に岩国に着いた。この時、家来の弘中隆兼が、厳島に渡るのは元就の計略に陥る所以で、頗る危険であるといって諫めたが、晴賢はこれを聴こうともしなかった。

晴賢はここで準備を整えて、幾日かの後に、500艘の船をつらねて、岩国の今津を出帆すると、まっすぐに厳島に行って、大元の浦に上陸した。そして陣を塔の岡（今の千畳敷及び五重塔のある処）に取って、毛利氏の城を見おろすようにした。なんだ、こんな小城を、ただ一揉みに揉みつぶしてくれるぞ、と気負ったことでしょう。

元就の部署

実際、この時に、宮尾城には僅かに300人しかいないのですから、晴賢がその大軍を以って討ちかかれれば、すぐにも陥りそうでした。陥ってしまえば元就の計略はだめになる。しかし、元就はもとより手ぐすね引いて待っていたのですから、どうしておめおめと落城などさせる筈があろう。時は弘治元年の9月下旬、元就はその兵3,500～3,600を率いて本営を草津（今の広島市の西南4kmの処）から地御前（厳島の対岸で、草津から西南約12km、今の宮島口駅からは東北約4kmの処）に移して、そこで諸将の手分けをした。

たまたま伊予の来島、能島らの諸氏が水軍を率いて来て援けたので、大いに勢いを得て、先づその兵を3軍に分けた。第1軍は元就自ら精兵3,000を率いて厳島の東北岸鼓ヶ浦に上陸し、博奕尾の嶮を越えて背面から陶氏の陣を襲うことにした。第2軍は元就の第3子小早川隆景を将として正面に向かい、宮尾城の兵と相応じて敵軍を牽制させることとした。第3軍は来島、能島らの水軍で、これは安芸の本土に沿って、敵の水軍に備えさせた。

暴風雨の夜

手分けがすっかり決まって、いよいよ出発の準備にかかっていると、9月30日の日が暮れてから、俄か

第10話 毛利氏の興起

ぼうふう お みそか かいじょう ま くら
に暴風雨が起った。夜になると、晦日（訳注：旧暦で新月）のことですから、海上は真っ暗な上に波
が高かったが、もとなり かえ
元就は却ってこれを天の助けだと喜んだ。この天候険悪に乗じて急に敵の不意を襲えば、
かなら しょうり え しん
必ず勝利が得られると信じたからであります。それで、その夜中に出発を命じた。

この時、彼は自分の船にだけ灯火を1つつけて、それを目印にさせて島に渡ると、船をことごとく対岸
かえ
に還してしまったということです。きゅうし いっしょう
九死に一生の戦いで、晴賢の首を取るか、もとなり
元就の首を取らせるか、2
つに1つの瀬戸際ですから、せとぎわ
全軍の者に決死の覚悟をさせたのです。又、敵の正面に向かったこばやかわたかかげ
小早川隆景
は、だいたん あまた てきせん わ い とが ちくぜん みかた
大胆にも数多の敵船の中に分け入って、敵に咎められると、筑前の兵がお身方にまいったのだと答えて、
じょうりく てきじん ちか よ あ そうこうげき ま
無事に上陸して、敵陣の近くで夜明けの総攻撃を待っていたということです。

不意打ち

明けて10月1日、夜の間にはばくちお けん もとなり
博奕尾の嶮を越えた元就の軍が急に関をつくって晴賢の本陣に攻め下ると、
たかかげ
隆景及び城中の兵もこれにに応じて関をあげて、3方から一時にどっと攻め立てた。ふうう たの まった けいかい
風雨を恃んで全く警戒
をおこた はるたか ぐんぜい ふ い ろうばい さわ
を怠っていた晴賢の軍勢は、不意をくらって大狼狽して、にわかにならんと騒ぎ出したが、狭い土地に大軍
じんど
が陣取っているのですから、さわ
騒げばさわぐほどますます自由を失って、ただ徒に混雑するばかりでした。
めいれい
命令などは少しも行われぬ。とう おか ほんえい たちま はいへい いっせい かいがん さ
塔の岡の本営は忽ちつぶれて、敗兵らは一斉に海岸を指して逃げ出した。

毛利方の軍勢が烈しくこれを追究すると、敗兵らはますます狼狽して、先を争って船に飛び込んだが、
むやみにどやどやとおおぜい いちどきの
大勢が一時に乗りすぎたので、見る間にぶくぶくと沈んでしまうのもあり、さもないも
すいぐん いっこう はたら
のも水軍としては一向に働けなくなってしまったところを、待ちかまえていた毛利方の水軍に急に襲撃さ
れた、陶軍はここでもまた まった やぶ
全く敗れました。

陶晴賢の自殺

ただひとりひろなかつかかね
弘中隆兼だけは、こういう事もあろうかと初めから思っていたので、敵の不意打ちと聞いた時
から最もよく防戦して、ぼうせん いくど そな た なお
幾度も備えを立て直そうとつとめて見たが、いったんう あしだ
一旦浮き足立った大軍はこれをどうす
ることも出来なかった。あきら
ついに彼も諦めて、この上は、せめて主人を無事に逃げさせようと、はるたか じゅうしゃ
陶晴賢に従者
をつけて急いで逃げさせた。

しかし、海岸に出て見ると、そこにはもはや乗るべき船が1艘も無かったので、はるたか
晴賢はどうしようかと
しあん く
思案に暮れているところに、ぐんへい
毛利方の軍兵がますます迫って来たので、進退ここにきわまって、ついに数人
の従者と共に自殺しました。又、ひろなかつかかね
弘中隆兼は、なおも最後まで踏み止まって奮戦したが、すでにこうまで惨
ばい お
敗に終わった上は、いかんともしようがなかったので、彼もまた自殺した。

こうしてこの戦いがもとなり けいかくどお お
元就の計画通りに終わると、彼は城中に入って、先づ城兵の功労を賞した後、
しんせい よご わ さっそくしたい たいがん はこ うえ
神聖な島を汚したお詫びとして、早速死体を対岸に運んだ上（訳注：今も巖島では葬式は出せず、対岸の本
ち そ つち と さ
土で行う）、血に染まった土を取り去り、更に巖島神社の社殿や回廊を洗い清めて、そして自ら参拝して、
せんしょう かみ しゃ かぐら
つつしんで戦勝を神に謝して、お神楽をあげた。いかに彼が尋常普通の武将と異なっていたところがあっ
たかは、これ1つを見てもわかります。

第10話 毛利氏の興起

それが済むと、毛利元就は全軍を率いて本土に引きあげた。そして地御前の近くの桜尾城に入って、そこで陶晴賢らの首を実験した上、盛んな凱旋式を行った。その城址は今は、廿日市町の公園になっている。又、晴賢の首はその近くの洞雲寺に葬ったので、今も首塚がその境内に在る。

大内氏の滅亡

さて、晴賢の死と共に、大内氏の勢力は殆ど全く衰えたが、しかし、山口にはなお大内義長がいたし、陶氏の本城の富田若山には晴賢の子の長房がいた。それで、元就は新たに大勝利を得た勢いに乗じて、10月7日に周防に入り、岩国の永興寺に陣を置いて周防の諸将を招いた。大内氏の武将で、一時勢いに従って晴賢に属していた者らが続々と相次いで降って来た。

間もなく陶氏の本城も毛利氏の軍に撃ち破られて、陶長房も自殺して、山口の大内義長もまた支えきれずに長府の勝山城に走った。彼はそこで大友氏の援けを得ようとしたが、その援兵が来る前に、早くも毛利氏の軍が攻め寄せたので、ついに義長もまた自殺した。こうして大内氏は全く亡びて、その旧領地はことごとく元就のものとなりました。

尼子氏の滅亡

すでに大内氏が亡びて、毛利氏がこれに代わって中国地方に覇を称えるようになると、当然に起こってくるのは、今まで大内氏の敵であった尼子氏との衝突です。元就は弘治2年のころから頻りに兵を石見および出雲に出して尼子氏と争ったが、ついに永禄5年の7月には、自ら大軍を率いて石見から出雲に乱入した。このころ、尼子氏は晴久がすでに卒して、その子の義久が後を嗣いでいたが、その勢力は漸く衰えていたのです。元就は途々に尼子氏の諸城を下して、同6年の10月からは、その本城の富田城に全軍を集めて、包圍攻撃をさせた。とはいえ富田城は、さすがに尼子氏の根拠地だけあって、容易には落ちなかったが、籠城幾年かの後、同9年11月21日に至って、ついに全く城内の糧食が尽きてしまったために、義久は出でて降った。尼子氏はここに亡びた。

十余国の領主

かくして毛利氏は、さきに大内氏の領地を併せた上に、今また尼子氏の領地を併せたので、中国、九州の地で10余国を領することとなり、大内氏よりもはるかに強大となりました。この時、元就はすでに70才の老齢で、家を継いだ年から44年を経ているが、しかし思えば、小田原の北條氏が、早雲、氏綱、氏康の3代で成し遂げた事より以上の事を、彼は1代で成し遂げたのであります。幼時に、巖島神社に参詣した帰りに、従者に行つて聞かせたという言葉なども、意味深く思い返されるではありませんか。

尼子の山中鹿之助

ところで、ここでついでにちょっとお話しておきたいことは、尼子氏の遺臣に山中鹿之助幸盛という忠勇義烈の士がいて、その後、幾度か兵を起して主家の回復につとめた事であり、彼は義久の又従弟にあたる勝久を奉じて、しばしば出雲、伯耆、因幡の間に転戦して、時にはかなりの勢いを得たこともあった

第10話 毛利氏の興起

のですが、天運拙く、ついに、志を達することが出来ずに、尼子勝久は自殺して、山中鹿之助は毛利氏に殺された。正親町天皇の天正6年7月のことで、月山富田城の落ちた時から12年の後です。されば、全く尼子氏の亡びたのは、この時だともいえます。

餅と酒

さて、元就は安芸の小族から身を起こして、よく山陰、山陽の大領主となっただけに、その心掛けにもふだんから大いに人とちがったところがありました。平生、座右に餅と酒とを備えておいて、酒の好きな者には酒、餅の好きな者には餅というように、おのおの将士の好みにまかせて、これをもてなしたということなどもその一例です。また、ある時、春の山路に花の咲き乱れていたのを見て、

うらむなよ心にもるる花もなし

という発句を詠んで、士民を愛撫する心を寄せたこともあります。

毛利元就の勤王

殊に元就は大義に通じていたことでも、戦国時代の武将としては誠に少ない幾人かの中の1人でした。大内氏が滅びた弘治3年の9月に後奈良天皇がお崩れになり、その皇子が踐祚して第106代正親町天皇となられたが、費用不足のために即位式をお挙げになる事が出来ずにいた。この事を元就は聞いて、大いに恐れ入り、直ちにその費用をたてまつったので、踐祚から3年の後に漸く即位式をあげられた。

元就の家訓

また、元就はその3子を戒めて、家を大切にさせるようにしたことで有名です。弘治3年11月25日に彼の書いた家訓が、戦前の吉川子爵家（吉川元春の子孫）に残っていますが、すべてで13カ条で、それを見ると、いかに彼がねんごろに、その3子の毛利隆元、吉川元春、小早川隆景に3人が共同して、毛利家を守るようにと戒めたかがよく分かります。今その箇条の2, 3を次にあげて見ます。

- 一、幾度も申し候が、毛利という苗字のこと、末代までもすたらぬ様、御心懸肝心に候。
- 一、元春、隆景の事、他名の家をつがるゝとも、それはまことの当座のこと、毛利の二字あだ愚にも忘れられまじく候。
- 一、申すも、もの舊いことながら、三人の仲少しでもかけ離れては、ただただ三人滅亡と思わるべく候。
- 一、隆元事は、隆景、元春を力と頼み、内外共に申付けらるべく、隆景、元春事は当家さえ堅固になれば、その力をもって家中に申付けるべく候。
- 一、この間も申し候如く、元春、隆景に間違いの事あらば、隆元は親気をもって之を咎むべく、また、隆元に間違いの事あらば、両人の言に従うべく候。

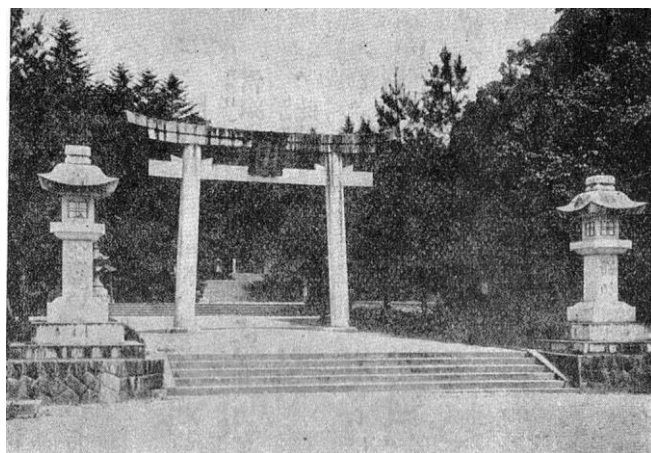
どこまでも兄弟仲よく、相信じ合い、相扶け合って、毛利家を守るようにというのです。

第10話 毛利氏の興起

かうして元就は、子孫繁栄の基を開いて、中国地方を平定してから5年の後、即ち元龜2年の6月に75才をもって亡くなった。その墓は今も安芸の吉田町に在る。翌年、朝廷は元就に従三位を贈られた。更に明治41年4月、明治天皇は特に正一位を贈られた。今、周防の山口市にある別格官幣社豊栄神社は、即ち毛利元就を祀った社です。

長子の隆元は、父に先立つこと7年、永禄6年の8月に41才で亡くなったので、その子の輝元が元就の後を継ぎましたが、元春と隆景の2人が心を一にして、これを援けたので、毛利氏は元就の死後といえども、その勢いは少しも衰えなかった。その後、子孫相ついで栄えて、明治維新の時には、名高い勤王藩主毛利敬親を出しました。

以下は、戦前の華族制度での話です。毛利公爵家は実に元就の子孫です。又、吉川子爵家が元春の子孫です。隆景の家も、江戸時代に一旦亡びましたが、また再興されて小早川男爵家となりました。



山口市 豊栄神社
同じ境内に毛利敬親の霊を祀る別格官幣社の
野田神社がある

(第10話 毛利氏の興起 終わり。 次は前頁に戻り、第11話 京都の疲弊 〜)